

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：30102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720128

研究課題名(和文) 19世紀末から20世紀初頭のロシア文化における文学と音楽のインターフェイス

研究課題名(英文) The Interface between Literature and Music in the Russian Culture from the End of the 19th century to the Beginning of the 20th century

研究代表者

高橋 健一郎 (Takahashi, Kenichiro)

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：80364206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は19世紀末から20世紀初頭のロシアの音楽と文学のインターフェイスに光を当てるものである。まず、これまであまり研究対象とされてこなかった作曲家たちの基本的な情報を整理し、楽譜や書籍を発表したほか、メトネルに関して、象徴主義との関係、その文化史的意味について研究した。具体的には、象徴主義者アンドレイ・ペールイやヴァチエスラフ・イヴァノフら象徴主義者、そしてイリインらとメトネルとの関係について整理し、ロシア文化史のけるメトネルの位置を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：According to the research project, I have done the following researches on the interface between Russian music and literature from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century. 1) I have gathered material on little-known Russian composers, and have published a booklet and 3 music scores. 2) I researched the relations between Nikolai Medtner and Russian Symbolism, concretely, the relations of Medtner, Andrey Bely, Vyacheslav Ivanov and Ivan Ilyin, and illuminated the role of Medtner in the history of the Russian culture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ロシア音楽 ロシア文学 象徴主義

1. 研究開始当初の背景

19世紀末から20世紀初頭のロシア音楽は、「五人組」やチャイコフスキーの時代がほぼ終わり、それらの弟子たち(アレンスキーやグラズノフなどの所謂「80年代組」)が中心的に活躍した時期であり、またその一世代後のラフマニノフやスクリャービン、メトネルらが頭角を現し始めた時代である。この時期のロマン派音楽については、一部の例外(スクリャービン)を除いて、「保守反動的」で音楽史的には特に見るべきものがないとされ、これまで研究が極めて手薄である。

研究代表者は研究開始時まで作曲家メトネルについて同時代人が書いた論文計14本を翻訳したが、その中には、20世紀初頭のロシア文化や思想の中にメトネルの音楽を位置づけようとする象徴主義詩人ペールイの論文も含まれている。最近まで「象徴主義と音楽」というテーマではほとんどスクリャービンしか言及されることがなかったが、実際にはメトネルの音楽のような「保守的」な音楽が「象徴主義者」から絶賛されていることを知るにおよび、メトネルと他の芸術分野との関係に関心を抱くようになった。平成18～19年度の科学研究費補助金(基盤研究(C))『ロシア・フォルマリズム再考:新しいソ連文化研究の枠組における総合の試み』(研究代表者:野中進)に研究分担者として参加し、そこではメトネルの執筆した音楽論の抄訳、分析を試み、その中でメトネルがロシアの象徴主義のほかにフォルマリズムの詩的言語論、アヴァンギャルド芸術などとも複雑な関わりを持っていることを明らかにした。また、近年のロシア音楽研究の中ではラフマニノフそして一世代前のリムスキー=コルサコフやチャイコフスキーらの音楽も象徴主義や同時代の思想・文学潮流と少なからぬ関わりを持っていることが少しずつ触れられるようになった。

さらに、研究代表者は2009年9月に、帝政末期のロシアの作曲家に光を当てる「日本アレンスキー協会」設立にかかわり、アレンスキー研究に着手した。アレンスキーもまたトルストイをはじめとして19世紀末の文学者たちと密な交流があり、そして同時代の他の音楽家たち(タネーエフ、スタンチンスキーその他)も同時代の文学や文学者たちと深い関係をもっていることも分かってきた。

これらに代表される文学(者)と音楽(家)の関係とは、単なる芸術家同士の交流というエピソードに終わるものではなく、互いの芸術観、作品に強い影響を及ぼしていることもあり、19世紀末から20世紀初頭のロシア文化を考える際に「文学と音楽のインターフェイス」は一つのキータームとなるはずである。この研究は、言語論、文学と音楽学にまたがる分野となるが、研究代表者は言語学、記号論などを専門に研究しているほか、音楽学、音楽史の研究も行い、また演奏家としてロシア音楽の演奏を積極的に行っており、その知

見も生かしながら本研究課題を進めていくことができる。その進展によって、ロシア音楽研究の穴を埋めるだけでなく、19世紀末から20世紀初頭の「銀の時代」のロシア文化に対する新たな視座を開くことが期待される。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀末から20世紀初頭の後期ロマン派に分類されるロシアの音楽家たち(グラズノフ、タネーエフ、リャードフ、アレンスキー、ラフマニノフ、スクリャービン、メトネル、スタンチンスキー他)の音楽が、同時代のトルストイや象徴主義、アヴァンギャルドなどの文学、思想とどのような相互関係をもつかについて、音楽内と音楽外の両面から考察し、「銀の時代」と呼ばれるこの爛熟期のロシア文化を新たな視点から再考することを目的とする。具体的には、以下の6点について研究する。

(1) ロマンズ歌曲の意味世界

文学と音楽の接点の代表的なものに「ロマンズ歌曲」というジャンルがあり、この時代の代表的な作曲家たち(アレンスキー、グラズノフ、タネーエフ、ラフマニノフ、メトネル他)によって書かれたロマンズ歌曲は数百曲以上を数える。歌曲は歌詞のみならず、音楽的側面(調性、リズム、旋律など)もまた歌詞との相互作用の中で「意味」を担う。ロシア詩が音楽的要素によってどのように歌曲の中で意味づけられているかを分析し、各作曲家の世界観を明らかにする。

(2) 象徴主義と音楽

近年までスクリャービンの「神秘和音」ぐらいしか論じられてこなかった「音楽における象徴主義」の問題を、チャイコフスキー、リムスキー=コルサコフ、ラフマニノフ、メトネルその他にまで広げて検討し、さまざまな音楽語法と象徴主義との関係を考える。

(3) トルストイと音楽家

この時代の音楽家たちの中には「トルストイ詣で」と呼ぶべき現象があり、多くの音楽家たちがトルストイと交流をもった。その相互間の影響についてはまだ研究の蓄積が不足している。特に近年再評価が進む作曲家スタンチンスキーに関しては、トルストイとの邂逅がもつ意味について従来のトルストイ研究の中でも触れられておらず、それを本研究では明らかにしたい。

(4) 象徴主義と音楽

イヴァノフとスクリャービンの関係のほか、メトネルと「アルゴナウタイ同盟」の関係、ペールイやブロークとの関係を考察する。

(5) イリインとメトネル

思想家イヴァン・イリインは生涯メトネル

の音楽を高く評価し、少なくとも6本のメトネル論を著している。その内容を検討する。

(6) メトネルとアヴァンギャルド芸術

メトネルは言語学の記述モデルを使ったアヴァンギャルド芸術批判の本を書いており、現代的な観点から言えば記号論的な著作でもある。それはアヴァンギャルド芸術に対する「内在的な」批判ともなっており、その思想的、音楽史的な意味を解説する。

3. 研究の方法

音楽と文学の相互関係について、日本ではほとんど入手不可能な基礎文献、楽譜などをロシアのアーカイヴなどを利用して調査、収集する。それをもとに音楽学や言語学、記号論などの知見を生かしながら「音楽内的関係の分析」(主としてロマンス歌曲の詩と音楽の相互関係の分析、象徴主義と音楽語法の関係)と「音楽外的関係の分析」(音楽家と文学者の関係、音楽潮流と文学潮流の関係)を並行して行うとともに、それらの間の相互関係も考慮に入れて研究を進める。

4. 研究成果

(1) 19世紀末から20世紀初頭に活躍したロシアの作曲家のうち、これまであまり研究対象とされてこなかった作曲家を中心に、その文学者との交流、影響関係などにも目を向けつつ、基本的な情報を整理した。

アレンスキーについては、ピアノ作品や声楽曲、交響曲、バレエその他主要作品の分析を行い、その成果は日本アレンスキー協会のシンポジウムや例会で発表したほか、また単著のブックレットの形で発表した。また、アレンスキーのほか、タネーエフ、リャードフ、グラスノフら、19世紀末から20世紀初頭のロシア音楽で重要な役割を果たした作曲家たちのピアノ作品を収めた楽譜の出版を企画し、その校訂、運指、解説の執筆を行った。そこでは、研究対象とする世代の作曲家の音楽史的位置を確認し、前の世代と後の世代との関係を明らかにし、また部分的に20世紀初頭の文学潮流との関係にも触れている。これらの作曲家のピアノ作品についての解説は従来の日本語文献ではほとんど語られたことのないものである。その他、タネーエフ、グラスノフ、カトワール、イッポリトフ=イヴァノフ、ブルメンフェリド、リャプノフの生涯、作品について研究し、それらについて日本アレンスキー協会第5回例会、第6例会において発表を行った。

(2) アレンスキーやラフマニノフと作家のトルストイとの関係について研究、考察を進めた。ラフマニノフとトルストイの関係については、従来単なる芸術家同士のエピソードとして紹介されるのみであったが、本研究を通じて、ラフマニノフの作品の歴史における初期から中期への移行において、トルストイ

との邂逅が本質的な意味を持ち得ることを明らかにした。その成果の一部は、新聞記事や雑誌記事などで公表した。

また、作曲家メトネルと象徴主義との関係、その文化史的意味について、具体的には、象徴主義者アンドレイ・ペールイやヴァチスラフ・イヴァノフとメトネルとの関係、また思想家イヴァン・イリインと象徴主義者、メトネルの三者の関係について整理し、文学者、思想家のメトネル理解について考察をした。これも紀要論文として公表している。これは従来ロシア象徴主義研究で見過ごされてきた側面に新たな光を当てるものである。

(3) さらに、ロシア歌曲について、同じ詩に異なる作曲家のつけたロマンス歌曲の分析を始め、その一部は「日本アレンスキー協会」の例会で発表したほか、声楽家と共同で演奏会の形で発表した。これは音楽と文学が直接的な関係をもつきわめて重要な分野であり、詩作品の多層的な意味が音楽というプリズムを通して明らかにされていく可能性を示すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9件)

高橋健一郎「ニコライ・メトネルの生涯と作品」/『月刊 CHOPIN』2013年8月号、67-69頁

糟谷里美、川染雅嗣、高橋健一郎他「19世紀ロマン主義音楽のバレエへの転用の可能性 — バレエ・リュス 作品《レ・シルフィード》に着目して—」/『昭和音楽大学研究紀要』第32号、2013年、57-72頁

高橋健一郎「アレンスキーの受容をめぐって」/昭和音楽大学平成23年度教員共同研究成果報告書『アントン・アレンスキーの音楽とバレエ・リュスとの関連性に関する研究~2 台ピアノのための組曲第1番から第5番およびバレエ音楽「エジプトの夜」を手がかりに~』2012年、5-11頁

糟谷里美、川染雅嗣、高橋健一郎他「バレエ《エジプトの夜》の成立背景と展開」/『昭和音楽大学研究紀要』第31号、2012年、149-161頁

高橋健一郎「ロシア文化史におけるニコライ・メトネル」/『札幌大学総合研究』第2号、2011年、133-159頁

高橋健一郎「ロシア音楽史におけるアレンスキーの位置」/昭和音楽大学平成22年度教員共同研究成果報告書『アントン・アレンスキーの音楽とバレエ・リュスとの関連性に関する研究~2 台ピアノのための組曲第1番から第5

番およびバレエ音楽「エジプトの夜」
を手がかりに〜』2011年、10-21頁
高橋健一郎「チャイコフスキーの謎」
/『月刊CHOPIN』2011年4月号、29
-31頁
高橋健一郎「図解! ラフマニノフ
/5つの視点から読み解くラフマニ
ノフ」/『月刊CHOPIN』2011年3月
号、22-30頁
糟谷里美、川染雅嗣、高橋健一郎他「音
楽と舞踊、バレエの関係性の変遷と課
題」/『昭和音楽大学研究紀要』第30
号、2010年、110-122頁

6. 研究組織
(1) 研究代表者
高橋 健一郎 (TAKAHASHI, Kenichiro)
札幌大学・地域共創学群・教授
研究者番号: 80364206

〔学会発表〕(計 7件)

高橋健一郎「ロシアピアノ音楽を開花
させた作曲家達(3)」/日本アレンスキ
ー協会第6回例会(2013年3月24日、
りんゆうホール)
高橋健一郎「ロシアピアノ音楽を開花
させた作曲家達(2)」/日本アレンスキ
ー協会第5回例会(2012年9月23日、
りんゆうホール)
高橋健一郎「ロシアピアノ音楽を開花
させた作曲家達(1)」/日本アレンスキ
ー協会第4回例会(2012年3月11日、
りんゆうホール)
高橋健一郎「アレンスキーとロシア音
楽」/アレンスキー生誕150年記念
日本アレンスキー協会シンポジウム&
コンサート(2011年11月27日、札幌
サンプラザホール)
高橋健一郎「ロシア歌曲の世界」/日
本アレンスキー協会第3回例会。(2011
年3月13日、りんゆうホール)
高橋健一郎「ロシア音楽史におけるア
レンスキーの位置」/平成22年度昭和
音楽大学教員共同研究公開講座(2010
年11月26日、昭和音楽大学)
高橋健一郎「ロシア音楽史におけるア
レンスキー(2)」/日本アレンスキー協
会第2回例会(2010年9月7日、り
んゆうホール)

〔図書〕(計 4件)

高橋健一郎『ロシア人作曲家 ピアノ
作品集 ~ロシア・ピアノ音楽を開花
させた作曲家達』(楽譜校訂・解説・運
指)ヤマハミュージックメディア、2011
年11月
高橋健一郎『アレンスキー 忘れられ
た天才作曲家』(ユーラシア・ブックレ
ットNo.168)東洋書店、2011年10月
高橋健一郎『ラフマニノフ ピアノ編
曲集』(楽譜校訂・解説・運指)ヤマハ
ミュージックメディア、2010年10月
高橋健一郎『ラフマニノフ 幻想小曲
集・サロン風小品集・4つの小品』(楽
譜校訂・解説・運指)ヤマハミュージ
ックメディア、2010年5月